教育新宝島

1986.10.29

「大造じいさんとガン」

子どもが作る問題はこれまでの授業の反映である

11月特典

向山洋一 教育資料

No 12

2024 NOV.

本資料について

　向山氏は次のようにいう。

子どもが作る問題は、今までの授業の反映である。
子どもが作る問題には、発展させるべき「課題」が含まれている。

　1986年10月、向山氏は、国語教育の主流（当時）であった「課題作り」をテーマに新しい指導方法を提案した。

　それが、『大造じいさんとガン』の授業である。

　今号は、この公開研究授業の

⑴ 授業映像
⑵ 実物資料、等

をお届けしたい。

　授業映像（本時）までの流れは、以下のとおりである。

一時間目　通読（何度か朗読させる）
二時間目　一回通読の後、問題づくり
三時間目「問題集」として全員の問題（401問）を印刷して配布
四・五・六時間目 自分で問題を解く
七時間目　グループ（４人の班）で話し合い
八時間目　演習問題を解く
九時間目　本時

　はたして、向山学級の子どもたちはどのような問題を作ったのか。

　また、向山氏は、子どもたちが作った問題をどのように発展させたのだろうか。

　本冊子には、以下の実物資料と大森修氏の分析が収録されている。

⑴ 向山洋一「大造じいさんとガン授業の構想」1986
向山実物資料 A12-01-01
⑵ 児童が作った問題例 1986
向山実物資料 A12-08-01
⑶「401問の問題集（抜粋）」1986
向山実物資料 A12-02-11
⑷「向山の演習問題」1986
向山実物資料 A12-02-04
⑸ 大森修『教育トークライン』
1992年5月号
向山実物資料 A12-11-01-01
⑹ 大森修『教育トークライン』
1992年6月号
向山実物資料 A12-11-01-02
⑺ 大森修『教育トークライン』
1992年7月号
向山実物資料 A12-11-01-03
⑻ 大森修『教育トークライン』
1992年8月号
向山実物資料 A12-11-01-04、
⑼ 大森修『教育トークライン』
1992年9月号
向山実物資料 A12-11-01-05

　なお、解説は長谷川博之氏である。

特典映像はこちら

https://vimeo.com/1021332799/637a939afb

●「児童が作った 401 問の問題集（表紙）」1986　向山実物資料 A12-02-11

「大造じいさんとガン」問題集

1986.10.24　雪谷小学校5年1組

氏名 桜本佳子

授業参観の方々へ

1986.10.22.　向山

1. 本単元の授業の構想

10日ほど前、北海道釧路の床潭小学校に行ってきました。国語の公開発表の記念講演に招かれたものです。170名余の参観者がありました。

床潭小学校のそれまでの研究の流れは「課題づくり」でした。

研究紀要を一読して、「おかしいな」と思いました。

例えば、次の課題です。

「リュシアンがどろぼうとまちがえた三人の男と会って心に思ったことを読み取る」

これは、見え見えの「やらせ」です。教師の課題そっくりだからです。

現在の国語教育の主流の課題づくり(を)、私ならどうするかと考えました。

もう一つ、斎藤喜博氏の文章に出てくる昔ながらの流れ…疑問を出し、調べ、話し合う、これを私ならどうするかと考えました。

以上のような問題意識が、本単元の構想の中心にあります。

II 本時までの流れ

(1) 問題作りと解答作業（おおよそ次のようです）

・一時間目、通読（何度か朗読させました）

・二時間目、一回通読の後、問題づくり

「この物語の問題を作りなさい。」

「一問できたら見せにきなさい」

五名ほどの問題をよみあげて、評価する。

「案の定とはどういう意味でしょう」…こういうのでいいのですよ

「この物語の中心人物はだれでしょう」…すごくいいですね。

答がわからない問題でもいいのです。

・三時間目、「問題集」として印刷したのを配布。（問題を出していない人は作る）

・四・五・六時間目　自分で問題を解く。

最低の義務を指示。（ex. 50問は解きなさい）
（解答例を5問ほどする。五時間目終るのとき）

・七時間目　グループ（４人の班）で話し合い

・八時間目　演習問題を解く。

・九時間目　本時。

(2) 問題の特徴　（次のようです）

①「読み」（一時間）だけの作業後の問題作りである。

②　小さな単位の問題である。

以上の二つを前提に作られた「問題」は、次の大きな特徴を持つ。

①　子どもが作る問題は、今までの授業の反映である。

これは、当然といえよう。「視点は何か」などの問題は、それを習っていなかったら、出ないはずである。

②　子どもが作る問題には、発展させるべき「課題」が含まれている。

例えば「大造じいさんは残雪をどう見ているか、残雪は大造じいさんをどう見ているか」などは、今後発展させるべき大きな問題を内包している。

これが、学習の中に生かされるためには2つの条件が必要である。

(A)「子供の問い」が大切だと発見できる教師の目。

教材研究の深さとその教師の学習理論の深さがポイントになる。

(B)「子供の問い」を授業に組み立てていく教師の腕

授業の技量がポイントとなる。

Ⅲ　本時の授業

本単元に入って、初めての話し合いです。

「残雪は大造じいさんをどう思っているか」ここから、「話者」「視点」「文章表現」にふれてみたいと思います。

●児童がつくった問題「大造じいさんとガン」1986　向山実物資料 A12-08-01

六　P92 L17　大造じいさんが、手をのばしても残雪がさわがなかったのは、なぜか。

七、P93 L4　残雪は、なぜ、大造じいさんのおりの中で、ひと冬をこしたのか。

八　P85 L3　残雪たちは、なぜ、広いぬま地の西側にいったのか。

九　かなたの空に黒く点々と見えたのは、何だったか。

十　P83 8〜9　ガンたちは、なぜ、ぬま地のうちで、そこが気に入りの場所になったのか。

コクヨ　ケー10　20×20

大造じいさんとガンの問題

中町　校里子

一、この物語は、何人称視点か。

二、中心人物は、だれか。

三、この物語の初めからおわりまで、何年たっているか。

四、P79 特別な方法を仕かけたとき、大造じいさんは何才だったか。

五、P94 残雪をにがしたとき大造じいさんは、何才だったか。

●「児童が作った401問の問題集（抜粋）」1986　向山実物資料 A12-02-11

1986.10.16. 向山学級

星 黎介

(1) P81に「じいさんは、思わず子どものように声をあげてよろこびました」と書いてありますが、どうしてこういうよろこび方をしたのでしょう。

P81のL3とL4の 1わだけであったが、生きているガンがうまく手に入ってうれしく思ったから。

(2) P81に「さかんにばたついたとみえて」と書いてありますが、どうしてですか

ガンがにげようとしてばたついた。

(3)「つりばり計略で生けどったガン」は、いつの季節にとったのでしょう。

秋 P81 L11

(4) P81に「たかが鳥のことだ、ひとばんたてばまたわすれてやってくるにちがいない」と考えて、「もっとたくさんのつりばりをまいておきました」とあるけど、残雪がいるのにどうしてそう思ったのでしょう。

残雪も鳥だから、わすれてまたえさを食べにくると思ったから P81L7L8

(5) P83L2、大造じいさんは、なぜ夏のうちからタニシを五俵も集めたのでしょう。

ガンのこのみそうな場所にばらまいて、ガンをつかまえようと思った。P83L3

(6) P88L1「心の落ちつくのをまちました」というのは、どうしてでしょう。

落ちついてなかったら、うちそこねてしまうかもしれないから。

(7) P90L3、「残雪の目には人間もはやぶさもなかった」というのは、なぜでしょう。

なかまを助けようとひっしになっていたから。P90L456。

坂野 彰秀

(8)「自在かぎ」とは、どういうものでしょうか。

いろりの上につるしなべ・鉄びんなどをかけて自由に上げ下げできるしくみのかぎ。辞典

(9) P85「残雪の本能」は、どう感じたのでしょう

様子の変わった所には近づかぬがよいぞとかんじた。P85L2

(10) P85の一羽のガンは「いつ、どうしてつかまえられた」のですか

秋にうなぎつりばりでつかまえた。P86L1.2

－1－

(11) P92.「第二のおそろしい敵」とは何ですか。 大造じいさん

(12) この物語の中心人物はだれでしょう　大造じいさん

(13) P86L8「これを使ってみるかな」のこれとは何のことですか　大造じいさんのガンをおとりにつかってガンをつかまえること

(14) P79「特別な方法」でガンは何びきつかまえられましたか。 1ぴき

佐野 貴篤

(15) 大造じいさんは．このとき．何才だったでしょうか　これでは．わかりません。

(16)「真一文字に横切る」とは．どういう意味でしょうか

(17) この物語の中心人物はだれでしょう　大造じいさん

(18) この物語の始めは．いつの季節でしょうか。 ~~秋~~ 冬

(19)「残雪」という名は．どうやってつけられましたか。 左右のつばさに1か所ずつ真っ白な交じり毛を持っていたから。

(20) この物語は．いくつのだん落にわかれていますか　4つ

(21) P79には．いくつの漢字がありますか　69こ

(22) P92L8「それは．鳥とはいえ．いかにも頭領らしい」のそれは．何をさしていますか。 残雪

高坂 征亮

(23) P85L3「~~[illegible]~~小屋を作って小屋でまっていて．ガンがにげていきました」なぜでしょう　残雪の本能が「様子の変わった所には、近づかぬがよいぞ」と感じたから。

(24) P88L10．「何か一直線に落ちてきました」何でしょう　ハヤブサ P88.L11

(25) P91．大造じいさんを見て何がにげたのでしょう　ハヤブサ P91L11～14

－2－

(26) 「飛びたつ残雪」に、大造じいさんは何と言ったのでしょう　P94L1〜7

「…ひきょうなやり方でやっつけたかねないぞ！なあ、おい。今年の冬もなかまを連れてぬま地にやってこいよ。そうして、おれたちは、また堂々と戦おうじゃないか」

(27) 残雪は、飛んでいったとき、どの方向にいったでしょう。　P94 L10　北

栗原 淳

(28) この物語は、いくつのだん落に分れていますか　4つ

(29) P80.「何かバタバタした」と書いてあります。何かバタバタしたのでしょう。　ガン

篠村 信匡

(30) ガンがりの話の中の大造じいさんは何才でしょう

(31) P94L2「ひきょうなやり方」とはどんなやり方でしょう。　ハヤブサがやっつけたガンをつかまえるということ。

(32) P79L5. ぬま地とはどこらへんにあるでしょう　栗野岳のふもと

(33) ガンの群れは、何わいるでしょう　13わ

(34) ガンの来る季節はいつですか。　秋

(35) P94L12「大造じいさんはどんな気持で見守りましたか。　また、堂々と戦おうと思いながら。

(36) この物語は、本当にあったことですか。

井田 泰浩

(37) 大造じいさんは、何回、残雪のちえに負けているでしょう。

(38) P92. 残雪はどこをハヤブサにやられましたか　むねの辺り

(39) 残雪という言葉は、何回出てきたでしょう。　24回

(40) ハヤブサと残雪が戦っているとき、大造じいさんは、一回じゅうをかまえましたが、また再びじゅうを落ろしてしまいました。それは、なぜでしょう。から。

残雪の目には人間もハヤブサもなく、ただなかまを助けようとひっしだったから。

(41) 大造じいさんは、今は、72才です。残雪をにがしてやったのは何才でしたか。

(42) この物語の中で、大造じいさんは何年間ガンをあきらめなかったのですか。

3年間

(43) この物語は、何段落でできていますか。

4

(44) 「いまいましく思っていたガン」を、なぜ大造じいさんは、はればれした顔で見送っていたのですか。

残雪はガンの英ゆうだったから。

(45) 残雪という名は、どうしてつきましたか。左右のつばさに一か所ずつ真っ白な交じり毛をもっていたから。

(46) P80L9～P81L9。この場面はいつのことですか

(47) P81L3。なぜ大造じいさんは「はてな」と首をかしげたのですか。つりばりのしかけておいた所に1ぴきもガンがはりにかかっていなかったから。

(48) P82L8。大造じいさんは「ううむ。」と、思わず感たんの声をもらしたが、どんなことに感じしたのですか。

残雪はすごいガンだと思いながら。

(49) P85 もう少しというところで残雪にしてやられた大造じいさんは、どうしましたか

「ううん」とうなってしまった。

(50) 大造じいさんが、長年の経験で知っていたガンの習性とは何ですか。ガンは、一番最初に飛たったものの後について飛ぶということ。

－4－

(51) P87. ガンがやってくるところがあります。残雪は、どんな様子で来ましたか。 いつものように群れの先頭にたってきた。

(52) P88 大造じいさんが「口ぶえ」をふこうとしたのは、なぜですか。 おとりのガンを飛び立たせるために口ぶえをふこうとした。

高野 寛

(53) 大造じいさんは、タニシを何俵あつめたか 五俵

(54) 大造じいさんは、何年前からがんがりをやっているか。 これではわからない。

(55) 大造じいさんは、いつごろから一わのがんも手に入れられなくなったか。 残雪がくるようになってから。

(56) なんでハヤブサは戦いをやめたか 大造じいさんがきたから。

(57) 大造じいさんは何才か これではわからない。

(58) 作者は若いか、年とっているか 年をとっている。

(59) がんはいつごろやってくるか 秋 冬

(60) 残雪とは何か。 ガン

(61)「えらぶつ」とは、どういう意味か えらいやつ。

宮田 鋼介

(62) この物語が書かれたのは何年ですか これではわかりません。

(63) P78. 栗野岳は高さ何メートルですか 1094メートル

(64) えらぶつとは、どういういみですか えらいやつ

(65) ウナギつりばりのしかけで、なぜ一ぴきしかつかまっていなかったのか

(66) 残雪は、なぜ頭がよかったのか　これではわからない。

(67) P92L6. 大造じいさんのうったたまをうけたがとばたあれていたか、立っていたか　いみがわからない。

和田　里美

(68) この物語は、大造じいさんがいくつの時のお話ですか。36か37

(69) この物語は、いくつのだん落でできていますね。4つ

(70) この物語は、いつの季節のお話ですか。冬

(71) この物語には、何年間のことが書かれていますか。3年間

(72) 大造じいさんがかっているガンはどのようにしてとったのですか。タニシを付けたウナギつりばりをたたみ糸で結び付けておくこと。

(73) この物語の語り手はだれですか。

(74) P85.L8. なぜ大造じいさんは「ううん」といったのですか。またしても、残雪にしてやられてしまったから。

(75) 大造じいさんは、ガンをとらえるため三つの方法を考えました。その3つとは何でしょう。72と同じ、おとりのしかけ方法、小屋の中からてっげこからぽうでうつこと。

(76) ガンがあさった形せきがあるのに、なぜ一わもガンが手に入らなかったのですか。えをすぐには飲みこまないで、まず、くちばしの先にくわえて、ぐうと引っぱってから食べる。

(77) 大造じいさんは、なに県に住んでいるのですか　鹿児島県

(78) 大造じいさんは、なぜ残雪をいまいましく思っているのですか。残雪がくるようになってから、一わのガンも手に入れることができなくなったから。

(79) 大造じいさんのおりの中でひと冬こした残雪は、どういう朝に、野性にもどったのですか　晴れた春の朝

—6—

(80) 大造じいさんは、なぜ銃じゅうをおろしてしま 残雪が、なかまのため
ったのですか。 にいさましく戦っていたから。

中町 枝里子

(81) この物語は、何人称視点か 三人称視点。

(82) 中心人物は、だれか 大造じいさん

(83) この物語の、初めからおわりまで、何年たってい
るか 3年

(84) 特別な方法を仕かけたとき、大造じいさんは何才
だったか。

(85) 残雪をにがしたとき、大造じいさんは何才だったか。

(86) P92.L11. 大造じいさんが、手をのばしても残雪が 最期の時を感じて、
さわがなかったのはなぜか。 せめて頭領としてのいげんをきずつけまい
としていた。

(87) P93L4. 残雪は、なぜ、大造じいさんのおりの中 大造じいさんが、残雪
でひと冬をこしたのか。 のきずを治してあげた。

(88) P85L3. 残雪たちは、なぜ、広いぬま地の西側にい 様子の変わった所には、
ったのか。 近づかぬがよいぞと残雪の本能がかんじたから。

(89) かなたの空に黒く点々と見えたのは何だったか がんの群れ

(90) P83L8.9. がんたちは、なぜ、ぬま地のうちで、そ 四、五日、ごちそうが
こが気に入りの場所になったのか つづいたから。

澤田 知恵

(91) P90L3. 残雪の目には、人間もハヤブサもありませ ただなかまを助けよ
ん。その時の残雪の気持ちは、どうだったでしょう。 うと思っていた。

(92) P92L11.「大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわぎませんでした。」どうしてですか (86)と同じ

(93) P89L14.「大造じいさんは、じゅうを手にしましたが、再びじゅうを下してしまいました。」どうしてですか (80)と同じ

(94) 大造じいさんが、残雪をにがしてやった時の(35)と同じ 気持ちは、どうだったか

(95) P92.L3.第二のおそろしい敵とは、だれのことですか。 大造じいさん.

(96) P88L11～P89L3.ハヤブサが来た時、なぜ大造じいさんのおとりのガンは、にげおくれたのでしょう 長い間かい慣らされていたので野鳥としての本能がにぶっていた。

(97) 三のだん落が、他のだん落より多く書いてあるのはどうしてですか。 大切なことが書いてあるから。

(98) 中心人物はだれですか。また、対役はだれですか。 ㊥大造じいさん ㊊残雪

(99) 何人称視点ですか 三人称視点

(100) P81L6の「これ」は、何のことですか。

(101) この話は、一口で言うとどんな事が書かれていますか。

(102) 残雪という鳥は、どんな鳥ですか。なかまをみすてない、いい鳥

—8—

辻　恵子

演習 1

右の絵は、教科書にかかれていたものです。AとBをくらべると大造じいさんのかき方が変化しています。

① どこが変化していたか。

② なぜ変化したと思いますか。

① ○ 61年の方はぼうしの上に、ふろしきをかぶっている。

○ 50年代の方は、大造じいさんの顔がみえているけれど 61年の方は、顔がみえていない。

② ○ 大造じいさんみたいにガンがりをやる人は、ふろしきみたいな物をかぶらなきゃいけないのに、50年代の方は、かぶっていないので石田さんは、ミスをした。（予想）

○ この物語を読む人に想像力をつけてもらうために、61年の方は大造じいさんの顔を書かなかった。国語は想像力をつけなくてはならないのに、50年代の方は、それをわすれてしまっていたので大失敗をしてしまったんだと思う。

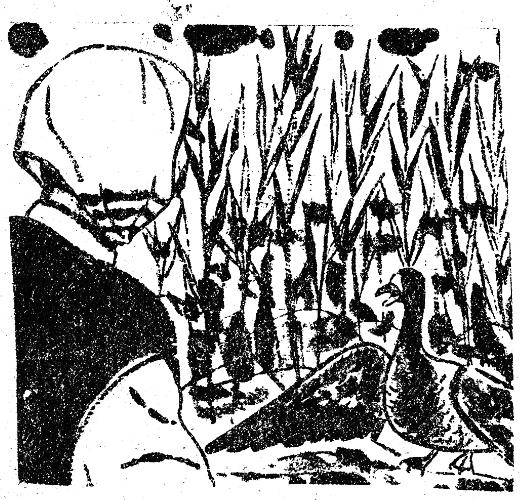
絵 石田武雄

↑

Ⓐ 前の教科書. 昭和50年代の頃の「光村図書」

Ⓑ. 今の教科書 昭和61年2月発行「光村図書」

↓



絵 秋野卓美

辻　恵子

演習2.

高野君は、次の問題を考えました。

「大造じいさんは、何才か。」

ところが、井田君たちは、これでは答えられないといいます。

どうして、これでは答えられないのでしょう

1、この物語は、5年間のことが書かれているので、その中のどの年かわからない。

はじめの説明のところか、第1・2・3・4しょう説のところの、どの年かわからない。

高野君の問題を修正してごらんなさい。

たとえば、

A「つりばり計略をやったときは何才だったでしょう」

B「ハヤブサが大造じいさんのかってるガンをおそったときは何才?」

上に書いた自分の問題に答えなさい。

こたえ

A、37～8才。

B、40才ぐらい。

A：37～8才

辻 恵子

演習３

大造じいさんの様子や心の動きを書いた文と、残雪の様子や心の動きを書いた文をぬき書きしなさい。

1、じいさん

◎大造じいさんは、ぬま地をかり場にしていた。
◎出かけていきました。◎待つことにしました。
◎わくわくしてきました。◎待ちました。◎にぎりしめました。
◎じいさんは、1わのガンも手に入れることができなくなったので、いまいましく思っていました。◎開きました。◎ぬらしました。◎とんがらせました
◎はい出してみました。◎ねらいました。◎下ろしてしまいました。

・じいさんは、特別な方法を考え、実行した。
・むねをわくわくさせた。◎開けてやりました。◎よびかけました。
・よろこんだ。
・感たんの声をもらした ◎つりばりをばらまいておきました。
・会心のえみをもらした。◎出かけていきました。
・ぬま地をじっとみつめた。◎首をかしげました。
・にっこりしました。　◎タニシをばらまいておきました。
・じゅうで残雪をねらった。◎まいておきました。
◎かけ付けました。◎もぐりこみました◎同じようなことをしました。
・手をのばした。◎待っているのでした。◎引きしまるのでした。
・心をうたれた。◎うなってしまいました。◎飛び付いてきました。
◎見守っていました◎独り言を言いました。◎考えていたのでした。

2、残雪

○大群を率いてやってきました。○えをあさるのでした。○小屋をみとめました。
○地上をみおろした。○感じたらしいのです。○着陸しました。
○真一文字に横切ってやってきました。○鳴き始めました。○飛び去っていきます
○空を横切りました。○ありませんでした○あるだけでした。
○ぶつかっていきました。○堂々たる態度のようでありました。
○なぐり付けました。○さわぎませんでした。
○ぬま地に落ちていきました。○努力しているようでもありました。
○ぐったりしていました。○体力も元のようになりました。
○敵が近づいたのを感じると…。○おどろいたようでありました。
○残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。○冬をこしました。
○にらみ付けました。○飛び上がりました。○
○北へ北へと飛び去っていく…。

左でぬき書きした文の文末表現をくらべると「ちがい」があります。

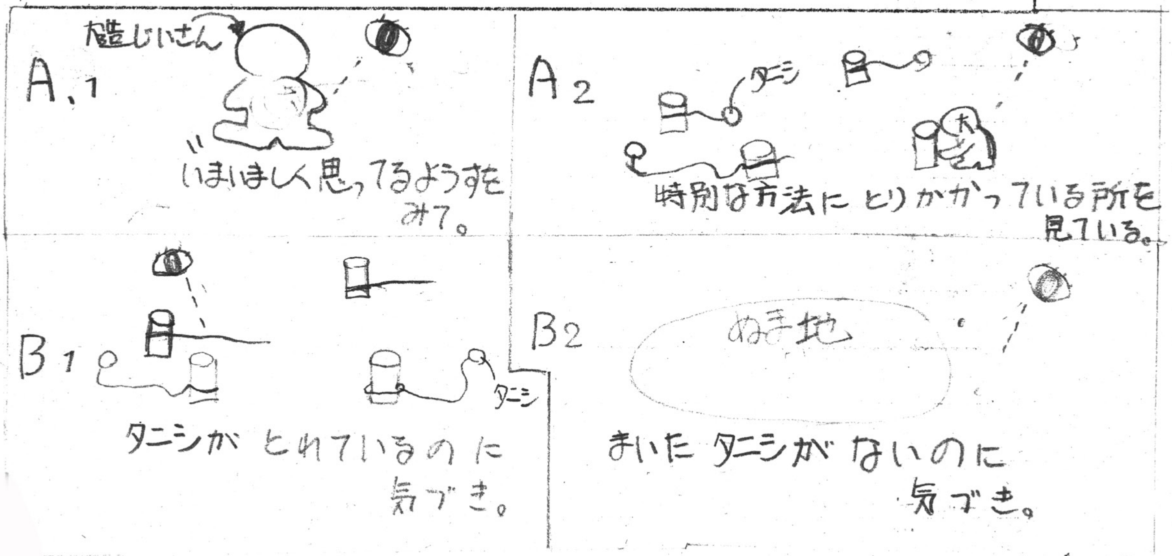
A いまいましく思っていました。

特別な方法にとりかかりました。

B 初めて飲みこんだらしいのです。

気に入りの場所となったようでありました。

話者がどこにいるのか、絵の中に「目玉」を書きなさい。AとBとくらべると「目玉の位置は、どうちがうでしょうか。



—4—

演習6

A．この物語は．いくつの段落でできていますか（和田ほか）
B．「話のくぎり」はいくつあるでしょう（高橋）
C　この物語の「起・承・転・結はどうなっているか（辻）

A

B　4つ

C　起は　P79の今年もから
承は
転は
結は

演習7

A. 大造じいさんと残雪は何回戦ったか（菅谷）

A　3回 8

●大森修『教育トークライン』1992年5月号　向山実物資料 A12-11-01

向山洋一の授業の分析　第5回

さらに、子どもが作った問題は、子どもがある程度の解釈力をもっていなければ作ることができない質の問題だった。解釈できない子どもが作る問題は「疑問」である。疑問ならまだしも「感想」でしかない。

向山学級の子どもが作った問題は、子どもの解釈力を示しているのである。これは、衝撃的である。

子どもが自らの力でどの程度解釈できているかが、問題を読むと分かるのである。こんなことは、氏の授業以前には考えられなかったのである。

(4) 問題を作れる力

子どもが「自ら学べる」ようになるためには、問題を作れるということが絶対条件である。

問題作りは絶対条件であるから、どの教科でも問題作りを重要な指導事項として捉え実践している。しかし、国語科だけは問題作りに成功していないといえる。問題作りに初めて成功したのが、「分析批評の授業」なのである。このことの意義は大いに強調されるべきである。しかし、強調された論文を見ることがほとんどない。なぜか、問題を作れるほどに子どもを育てていないからである。

問題を作れる子どもを育てること。これは、「分析批評の授業」をなぜするのかの一つの答えである。それも、重要な答えの一つである。

向山氏の授業の衝撃はこうした点にこそあるのである。射程距離は「国語」を超えている。子どもの自立こそ向山実践の標的である。

「大造じいさんとがん」の授業の衝撃はだからこそ強い。

2・「大造じいさんとがん」の授業記録

T　大森君は次の問題を考えました。「大造じいさんは何歳か」

ところが木村君達は答えられないと言います。どうして、これでは答えられないのでしょう。

ノートに書いてみてください。書き終わった人は見せて。

——作業——

「いつのことか分からない。」これだけでは先生には分かりません。いつのことをもっと正確に書いていらっしゃい。「言葉がたりない。」これもどういう言葉がたりないのか、付け加えてもらってらっしゃい。

さて、子どもはどのようなことを理由として上げただろうか。

以下は次号のお楽しみ。乞うご期待。

向山洋一の授業の分析

「大造じいさんとがん」その1

大森　修

1・驚くべき発想

向山氏が「大造じいさんとがん」の授業を発表したとき、私は衝撃をうけた。

氏の授業は私に衝撃を与え続けている。衝撃をうけなかった教師は、国語の授業を改善するために悩み苦労をしていない教師である。第一歩を作り出す労力と作られたのを改善する労力では天と地の開きがある。両者の違いが分からない人である。

知ることと知ったことを授業として具体化することでも同じことが言える。知ったことを授業として具体化する方が前者に比して数倍の労力がいる。

氏の授業のすごさは、第一歩を記しているというすごさなのである。それも、簡単には乗り越えられないすごさなのである。

「大造じいさんとがん」の授業が与えた衝撃とはなんであったか。

(1)　子どもが作った問題数の多さ。

数より質という方がおられる。これは間違っている。数多くつくれるから質の高い問題も作れるようになるのだ。技術が研かれていくからである。最初から質のよい問題を作ろうとするからいつまでたっても質のよい問題が作れないのだ。

質が問題だという教師は自分でまず問題を作ってみたらよい。いくつ作れるか試してみたらよい。向山学級の子どもにかなわないことが分かるだろう。

(2)　授業展開のコロンブスの卵

膨大な数の問題を作れる学級がなかった。だから、「問題づくり」は指導計画を見れば分かるように一時間で事足りていた。

私は、「共通課題の組織化」という論文を教職五年目に書いた。「問題作り」が、子どもの疑問をつぶしていることを論証しようとしたのである。子どもが作った問題をつぶさないで「共通の課題」に作り上げようとした教師は何をしたか。「共通の課題」を作るために何時間も子どもに話し合いをさせたのである。単元配当の時間全部を使っても「共通の課題」ができないこともあった。このような経験をした教師は、結局子どもが作った問題を教師がいくつかに括って課題を作ったのである。袋小路から抜け出すことができなかった。

向山氏はどのようにしたか。

「問題集」を作ったのである。「問題集」を子ども一人一人が解くようにしたのである。

そして、問題のなかから「演習問題」をわけ、学級として解決する問題を設定したのである。

こんな単純なことができなかった。考えることができなかった。何年も悩み苦しんだにもかかわらず考えられなかったのである。だからこそ衝撃が強かったのだ。

(3)　どこの学級でも作られる問題ではない。

子どもが作った問題には、見たことがない問題があった。

「分析批評」の授業を受けた子どもでなければ考えることができない質の問題がいくつもあったのである。

●大森修『教育トークライン』1992年6月号　向山実物資料 A12-11-02

向山洋一の授業の分析　第6回

C　38。
C　37。
C　36。
C　36〜37。
C　40。
T　一人だけ72歳なんですが、教科書のどこを見れば分かるんですか。
C　78ページ。
T　「じいさんは、72歳だというのに腰一つまがっていない、元気な老狩人だった。」というふうにありますね。
　そして、「今から、35・6年前」というふうにありますね。このときには35・6歳なんですね。
　桜井君が思ったのも無理はない。教科書が違っているという話ししましたね。これは、10年以上前に使っていた教科書なのですが、教科書の挿絵がちがっているのです。年寄の絵が描かれている。教科書に描えた人が間違えたのです。
　物語の大造じいさんは、35・6歳ですから。大人だって、専門家だって間違えるのですから、桜井君が間違えるのも無理はないです。
　でも、君達が一回教科書を読んだだけで、気が付いたわけですから、日本中の小学5年の中で一番優秀です。
T　桜本さんが作った問題で、267、268。
　267は、「大造じいさんは、残雪をどのようながんだと思っているでしょう。」
　268は、「残雪は、大造じいさんのことをどんな人間だと思っているでしょう。」
　268やります。
　これは桜本さんの問題なので、桜本さんに答えてもらいます。
C　優しい人間だと思っているけど、やっぱり人間は敵だと思っている。
T　それでは、これについて桜本さんと同じように意見があったら。
C　敵だけど少し優しいと思っている。

T　残雪は、大造じいさんのことをどう思っているのでしょうか。

　隣の人と話し合ってごらんなさい。

さて、このあと授業はどのように展開しただろうか。続きは、次回にしよう。
ここで、読者の方々に課題を出したい。その課題とは何か。

課題1
ここまでに向山氏が使っている代表的な教育技術を挙げよ。そして、その技術の教育的効果について述べよ。

課題2
法則化新潟の三人に授業分析を依頼したが、課題1のような問題意識はなかった。三氏は何を分析しただろうか。

技術の見え方は何によって決まるのだろう。

向山洋一の授業の分析

「大造じいさんとがん」その2

大森 修

T 「大造じいさんとがん」を読んで、自分で問題を作って、それを解いていたのでしたね。
今日から、意見を聞いてみます。もう一度言います。

> 高野君は次の問題を作りました。「大造じいさんは何歳か」。
> ところが井田君達は答えられないといいます。どうして、こたえられないのでしょう。

意見があったら、その場で立って発表しなさい。かちあうようなことがあったら、ゆずりあってください。

C その物語何年も経っているので、たとえば「今」というふうにいつのことを入れると分かるけど、いつのときのことかないので分かりません。

C いつのときのことか分からないので、例えば、「残雪を見送ったときは何歳か」というふうに「時」を入れればいいと思います。

C このお話は、何年も経っているので、いつの年を書いていいのか分からない。

C 「何ページは、何歳か」というふうにしないと分からない。「84ページは何歳か」ならわかりやすい。

C 高野君は、いつの時かをいれてくれなければ答えられない。この物語は4年間のときのことが書いてあるので、答えられない。「何ページの時大造じいさんは、何歳か」なら分かります。

C この物語は4年間のことが書いてあるので。

T 以上ですか。
高野君、これでは答えられないの分かりましたか。

> それでは、答えられるような問題になおしてください。
> できたら、前にきて書いてみてください。

――作業――

T こちらから、立って言ってください。

C 大造じいさんが、一番始めにがんをつかまえようとしたとき何歳か。

C 大造じいさんが、残雪をにがしてやったとき何歳か。

C 大造じいさんは、始めと終わりのとき何歳でしょう。

C 作者がじいさんから話を聞いた時何歳でしょう。

C 今書かれた物語としたとき、大造じいさんは何歳でしょう。

C 大造じいさんの最初の年は何歳でしょう。

T 答えられるのとちょっと答えにくいのがあります。それはどれですか。

C 今何歳かは、高野君と同じで答えられない。

T 今何歳ですか。

C もう死んでいるよ。

T この教科書、今使っているでしょ。72歳なの。10年前も同じ教科書を使っているのね。
二つに分けると、「物語を聞いたときは何歳ですか」というのと、「この物語のときは何歳ですか」に別れますね。

> この物語を聞いたとき何歳か分かりますか

C 72。

> この物語のときは、だいたい何歳くらいですか。

C 72歳。

向山洋一の授業の分析　第7回

対でしょうか。結論だけ言ってください。
●反対
●反対
●賛成
●書いていないと思います。
難しいです。
沢田さんの言った「残雪の気持ちが書いてあるか、書いていないか」この次にやります。沢田さんはもうひとつ言ったんですね。言ってみてください。
C　この物語は、大造じいさんが残雪を見ているときの話だから…
T　カメラとして、大造じいさんの方から写している。だから、残雪の気持ちは書いていない。
両方とも同じような問題なのですね。次の時間に勉強したいと思います。

以上が授業記録である。
余談ではあるが、授業のテープおこしを勧めたい。今日の授業はよかったなと思ったら、その授業を記録したらよい。「大造じいさんとがん」のようにである。このような記録にするということは、よい点も悪い点もあからさまにするということである。ほとんどの授業は、このような記録にすると耐えられない。いいなと思った授業でもたいがいは耐えられない。だからこそ、改善すべき点がいくつも自覚できる。
ただし、このような形にして発表するかどうかは別である。シンプルにして授業の骨格を示した方が、読者には言いたいことが明確に伝わる。向山氏の授業はテープをおこしても耐えられる数少ない授業なのだ。
さて、法則化新潟の後藤氏の分析を以下に示す。どれくらいの分析力だろうか。

1　一人一人に意見を持たせる。
最初の発問（「大造じいさんは何歳か」は、どうして答えられないかを問う）をしてから、作業をさせ、見せにくるよう指示している。
多くの先生は、一人一人に意見をもたせるための作業は、ここまでなのではないか。
しかし、向山先生は、途中作業を中断させている。意見が不十分だからである。
そして、正確に書くよう指示して作業を再開している。それも、全体に注意しているのである。ノートを見せに来た子一人一人に注意するというのではない。一人一人のノートは、黙って見ているだけである。
それによって、全体に指示が徹底する。「もう一歩」のつっこみである。

2　もう一歩のゆさぶり
「残雪は、大造じいさんをどう思っているでしょうか」の発問に対する沢田さんの発言は、この授業の中では、非常に重要である。しかし、クラスでは、少数に止まっている。
そのとき、さらに、「残雪の気持ちがどこに書いてあるのか、また書いていないのかさがしなさい。」と指示し、もう一歩つっこんでいる。
けっして結論をいそがず、もう一歩、もう一歩とゆさぶっている。そうすることで、重要な発言が浮かび上がってくるのである。
後藤氏は、向山氏の「もう一歩」に注目している。では、あとの二人はどうか。次回に。

向山洋一の授業の分析

「大造じいさんとがん」その3

大森 修

T 残雪は、大造じいさんのことをどう思っているのでしょうか。

隣の人と話し合ってごらんなさい。

T もう一回桜本さんから言ってもらいます。そのことに対して賛成意見とか、反対意見とかいろいろあると思います。立ってどうぞ発表してください。

C がんのことをとる人間だと思っていて、敵だと思っている。

C 仲間を捕まえるんだから、優しい人間じゃないと思っている。

C 助けてくれたから、敵だと思っていても、優しい人間だと思っている。

C 仲間を捕まえようとした、恐ろしい敵。

C 桜本さんの意見は賛成と反対が混ざっている。

C 優しいというのは私達の考えで、残雪にとっては、教科書「〜」残雪にとっては敵。

C 助けてくれたのは、お礼は言いたいが、まだまだ油断がならない。

T 以上で全部ですか。

沢田さん、さっきから手が動いているんですね。言ってごらんなさい。

C みんな最初から、優しいとか敵だとか思っているんですけど、そういうのは、証拠はあるんですか。大造じいさんが残雪を見ているから、残雪の気持ちは書いていないから、ただの予想だと思うんですけど。先生は、答えを書くときには証拠がいるって言っていたので。

C 「残りの力をふりしぼって長い首を持ち上げました。」というのは事実だから、敵だと思った。

T 残雪は恐ろしい敵だと思っている、または、恐ろしい敵だけども優しい心を持っている。どちらかだと思う人手を挙げてごらんなさい。

19人

沢田さんは、そういうことは書いていないから分からない。証拠がないので答えられない。沢田さんに賛成の人手を挙げてごらんなさい。

8人

残雪の気持ちがどこに書いてあるのか、または書いていないのかを探してください。証拠を探しなさい。

――作業――

T ここまでであったという人手を挙げて。ないって言うひと。じゃあ意見を聞いてみましょうかね。

C 93ページの11行目から14行目「〜」のところで、残雪の気持ちがあらわれているような気がした。

T 気がした。気がしたというのは、大事なことなんですね。しかし、井田君、そのことを桜井君だとか坂野君だとか、みんな同じように感じると思いますか。人によって違うことなんですね。

だれが読んでも書いてあるということを聞きたいわけです。

小学校の先生たくさんいます。沢田さんが言った「残雪の気持ちが書いていない」という意見に賛成でしょうか反

向山洋一の授業の分析　第8回

①　思い入れ読みをしてはいけない。文章中の表現に明確な証拠を求めなければならない。
②　残雪の思いが書いてないのは、視点が大造じいさんの側にあるからだ。

授業者「残雪の思い」を問う。
子どもは様々な思いを言う。しかし、それは「思い入れ」の入った読みである。例えば、
・助けてくれたから、敵だと思っていても、優しい人間だと思っている。
・仲間をつかまえようとした、恐ろしい敵。
・助けてくれたのは、お礼が言いたいが、まだまだ油断がならない。
など。これに対して、沢田さんを指名して反対意見を言わせる。
・みんな最初っから、やさしいとか敵だとか思っているんですけど、そういうのは証拠があるんですか。大造じいさんが残雪を見ているから残雪の気持ちは書いてないから、ただの予想だと思うんですけど。
そこで、授業者は「証拠を探せ」と指示する。子どもは証拠を探すが、明確な証拠はない。
それは、なぜか？　視点が大造じいさんの側にあって、残雪の側にないからである。
このように、授業者は「残雪の思い」を問うて最終的に「視点」の問題を考えさせようとしているのである。

このように、一つの問題を解決するために、いくつかの内容を扱うような発問が「射程距離が長い」のである。そして、このような問題が良い。なぜならば、このような発問は、学習すべき内容を直接に問うていない。つまり「間接性の原理」に支えられているからである。
そして、この発問が優れているもう一つの理由は、これが子どもが作った問題だからである。しかし、子どもはここまで考えて作るわけではない。このような良質の問題を子どもが作った問題の中から発見できる教師の力が優れているのである。

以上が法則化新潟の三氏による分析である。
後藤氏は「もう一歩」の技術を述べている。大田氏の文章は何を述べたいのかよく分からない。松野氏は「残雪の思い」を問うて最終的に「視点」の問題を考えさせようとしているというように重要な箇所にかすってはいる。しかし、不十分である。

私は第2回で課題を出した。次の課題である。

> ここまでに向山氏が使っている代表的な教育技術をあげよ。そして、その技術の教育的効果について述べよ。

次回、この課題に答えることにする。

「大造じいさんとがん」その4

大森　修

今回は前回に続いて、法則化新潟の二人の授業分析を掲載する。大田博之氏と松野孝雄氏の分析である。お二人とも30代に入ったばかりの「中堅教師」であると共に法則化新潟の中核を担う教師である。

大田博之（新潟市立笹口小学校）

向山氏の主要な発問と指示を「授業記録」から引用する。

> 発問1　高野君は次の問題を考えました。「大造じいさんは何歳か」ところが井田君達は答えられないといいます。どうして答えられないのでしょう。

子どもは、考えをノートに書き見せにいく。

> 指示1　いつのことかをもっと正確に書いていらっしゃい。

作業をやめさせ、次のように指示する。

> 指示2　意見があったら、その場で立って発表しなさい。

子どもは次のように発言をした。

> C　いつのときのことかはわからないので、例えば、「残雪を見送ったときは何歳か」というふうに時をいれればいいと思います。＜以下、発言が続く＞

> 指示3　それでは、答えられるような問題になおしてください。できたら前に来て書いてみてください。＜発表＞
> 発問2　この物語を聞いたとき何歳かわかりますか。
> 発問3　この物語のときは、だいたい何歳くらいですか。

高野君の「大造じいさんは何歳か」という問題を、このように向山氏は、実に「しつこく、しつこく」子どもに考えさせている。

その結果、次の事態が生じた。

> ①高野君の問題を巡り「論争」が生じた。
> ②「言葉を根拠」にした発言が多くなってきた。

また、「残雪は、大造じいさんのことをどう思っているでしょうか」に対する友達の答えを聞いていた沢田さんは、次のように発言した。

> みんな最初っから、やさしいとか敵だとか思っているんですけど、そういうのは証拠あるんですか。

向山氏の子どもの鍛え方は尋常では無い。

松野孝雄（新潟県西蒲原郡吉田北小学校）

> 授業者の発問の射程距離がどれだけ長いか

という観点から授業を分析する。

向山氏の授業における後半の発問である。

> ○残雪は、大造じいさんのことをどう思っているでしょうか？
> ○残雪の気持ちがどこに書いてあるのか、または書いていないのか探してください

授業者は、直接的には「残雪の思い」を問うている。しかし、授業者が問題にしようとしているのは「残雪の思いがどうであるか」という内容ではない。この発問のねらいは2つある。

向山洋一の授業の分析　第9回

発　問
○対立がある。少数対多数。少数が正解。逆転が生じる。
○物語の仕組みから視点へ

このように発問を見てくると分かる。

・物語全体を相手にして授業をしている。

これはできるようでできない。向山氏も物語全体を相手にした授業への取り組みを訴えたことがある。しかし、まだ、実現されていないのである。氏とはあまりにも力が違いすぎる。

・仕組みから視点へ

・問題の修正を通して正確に読ませる。

これもできるようでできない。全国国公私立中学入学試験問題を授業できるくらいの力が教師になければできない。子どもも入学試験に挑むくらいの力がなければできない。氏の授業は問題の修正を通して、読み方を教えるというウルトラC級の授業である。

(4)討論の技術

先に向山式発言の方法を述べた。この方法を採用されたことがある教師なら必ず直面する問題がある。

その問題とは何か。

子どもの発言がでてしまうとシーンとしてしまう。教師も何をしたらよいかが分からない。

このような事態を防ぐ方法がこの授業記録で示している。しかも、1回ならず2回3回と使われている。

それは何か。

私がこの技術を自覚したのは、これが最初ではない。しかし、これまでは他の技術に関心が向いていてさほど自覚されなかったのである。

この技術の教育効果は述べるまでもないであろう。

(5)発問の技術

松野氏が述べている。

では、後半で使われている技術は何かを見てみよう。

(1)子どもを「見取る」技術

気が付いた方も多かっただろうと思う。

枠囲みで示しておいたからである。

(2)「もう一歩」の技術

向山氏はこの技術をかなり自覚して使っている。また、御自身の授業展開ではかなり重要な技術として位置付けられている。「現代教育科学」誌で述べられていたから知っておられる方もおいでと思う。

しかし、この技術を使いこなすことは非常に難しい。この技術こそ瞬時に働く技術だからである。

やってみられたらよい。「もう一歩」とおもってやったら、子どもがだまりこくってしまったという結果になるから。

教育技術は瞬時に発揮されるから、「あれども見えず」になりやすいのである。さらに、今、自分自身が抱えている問題に対応して意識が働くから、「あれども見えず」にもなるのである。問題意識は移っていく。問題意識の移りが、いままで見えなかったものを見えるようにしてくれる。氏の著書を何回も読む意義がここにある。2回目は2回目なりのものが、3回目は3回目なりのものが見えてくるのである。それもまた、読者の技量の向上を示しているのである。何回も読み、何回でも話を聞こう。

向山洋一の授業の分析

「大造じいさんとがん」その5

大森 修

課題を出しておいた。次の課題である。

> ここまでに向山氏が使っている代表的な教育技術を挙げよ。そして、その技術の教育効果について述べよ。

向山氏が使っている教育技術はいくつあっただろうか。いくつ見付けられただろうか。

(1)確認の技術

この技術は、後藤氏と大田氏も気が付いている。教育的効果については述べるまでもないであろう。

(2)意見発表の技術

子どもに何通りの方法で意見の発表をさせているだろうか。「大造じいさんとがん」の授業での発表の方法は、向山氏が発表するまで、90%以上の教師が採用したことのない方法なのである。しかし、現在この方法を知らない教師は、勉強が不足している教師くらいなものである。では、これほどまでに知られている方法を授業でしているかというとこれが知っている割合に比して少ないのである。この発表方法の教育的効果についても省略する。考えてもらいたい。

(3)授業の組み立て技術

授業記録の枠組みの発問を示す。

> 「大造さんは何歳か」という問題は答えられないという。どうして、答えられないでしょうか。

↓

> 答えられるような問題になおしてください。

↓

> 残雪は、大造じいさんのことをどう思っているでしょうか。

↓

後藤氏は、向山氏の発問の「異常さ」に気付いている。松野氏も気付いている。

なぜ、「異常」なのか。

その前にもう一度発問を見てみる。

> 発問
> ○考えの対立がある。
> ○一人対多数。多数が正解。
> ○話し合いは教える、納得させるという方向にむく。

↓

> 発問
> ○考えの対立はない。しかし、物語の構造の理解度には差がある。構造を理解したうえで問題を作れるか。問題を作れるということは二つのことが分かっていることだ。
> ・まえがきと本文との違い
> ・本文が何年間の話なのか
> ○問題を作るという行為がうえの二つを分からせることもある。

↓

向山洋一「大造じいさんとガン」

長谷川　博之

1. 本授業映像を見る視点

> ①『分析批評』は子どもに問題を作らせないから駄目だ」と批判される方がいる。全くの嘘である。子どもに問題を作らせても『分析批評』の授業になる。
> ②「子どもの提出問題そのまま」というのは、子どもたちに対する信頼があるということである。子どもたちの提出した問題で十分に学習が成立すると考えているのである。
> ③「子どもの学習問題作り」による授業が高く評価されるとしたら、それは「子どもが問題を作った」ことにあるのではなく、「今までの学習には全くなかった新しい視点・角度を提出した」場合である。
> ④ここで大切なのは、「文末表現」を検討する一つの手だてを持っているということである。視点について知っていなければ、このような自覚はないはずである。この点こそが、分析批評の強さである。つまり、文章を検討する一つの技術を身につけているということである。それが、大きな効果を現わすのである。

以上、すべて向山氏の言葉である（『「分析批評」で授業を変える』）。ここに、氏が本授業を構想し、実践した意図と教育界への問題提起とが凝縮されていると私は考える。

この四点を踏まえたうえで、特典映像を視聴していただきたい。

> 氏の、子どもへの見取り・介入からの学び

のみならず、

> 教育実践史上における本授業の価値の理解

がより深まるにちがいない。

これまで分析批評の観点を学んできた向山学級の子どもたちは、「大造じいさんとガン」を一読、二読しただけで、分析批評の観点を知らなければきっと生まれないであろう「視点、角度」からの問題を次々と作り出しているのである。ただ単に「教師のコピー」をしているわけではない。中には、「『今までの学習』を越える（ママ）ような場合」がある。そして、それらは「よほど教師が注意深く、子どもの問題を分析しないと見のがしてしまう」のである。

これで映像を見る視点がまた増えた。

> 氏がその問いを取り上げた意図は何か

である。

その問いを取り上げることで何を学ばせようとしているのか、子どもたちの学び方のどこをどう修正しようとしているのか、そして従来の国語教育の何を否定し、何を創造しようとしているのか。

これらの問いを意識してくりかえし視聴することで、本授業映像の価値は幾倍にも膨れ上がることだろう。

間違いなく言えることがある。本授業には、「読む力」を確かに伸ばす指導と、「学び方を学ばせる」指導が随所に散りばめられ、それらが子どもたちに、確かに浸透している。

２．問題づくりの「いま、ここ」

2024年のサマーセミナーにおいて、「長谷川学年120名からの挑戦状」と称し、「語り語られ問題」を授業した。まさしく向山氏の問題づくりの延長線上にある実践である。小説を自力分析し、問いを立て（私は「問い出し」と名付けた）、小グループの協働をとおして問いを解決し、それでも解決できない問いや、広く意見を集め討論したい問いをMiro（オンライン共同編集ホワイトボードツール）に設けてある「全体検討シート」に書き込む。

私の授業では、ここまでが自動化されている。すなわち、何について討論するのかが「スプシ」（Googleスプレッドシート）やMiro等で予め提示されており、生徒は各論点に対する自身の考えを記入したうえで授業に臨むのである。

『走れメロス』の論点を例示する。

１．最後のシーン（「一人の少女が……」）は語られる必要があるのか。
２．「緋のマント」は誰のものか。
３．どんな出来事に対して「赤面した」のか。
４．「勇者は」の主語は適切か。

これらの論点を基に討論をとおして学びを深めていく。

谷和樹氏をはじめ外部から参観者のあった授業における討論の一部を紹介する。

「私はこの６行が本当に必要のないものだと思っていて、あってもなくても物語に関わらないというのと、そもそもこの６行はただ単に娘さんがメロスの裸体が見られるのが恥ずかしいから、という後日談みたいになっている。だったらなくてもいい。『王様ばんざい』『王様ばんざい』で、『メロス完!』で終わりにしていいと考えます」

「僕が必要だと考える理由はふたつあって、まず『一人の少女』で『かわいい娘さん』だから、『早くそのマントを（中略）たまらなく口惜しいのだ』で、この娘さんはメロスのことが好きだと思って、好きってわかって『勇者は、ひどく赤面した』だから、このあとに恋愛的な感情が生まれると思ったから、この部分は要ると思い、また、今回は友情だけれど次は愛情が描かれるのではないかと思いました。もうひとつは、『緋のマント』というものに意味があるんじゃないかなと思いました。これはRYOTAが教えてくれます」

「僕はこの最後のシーンは大事だと思います。まず１行目に『一人の少女が、緋のマントをメロスにささげた』とあります。その『緋のマント』は赤いマントで、それは王様がつけているような赤いマントだと僕は想像します。そう考えると、マントをつけたメロスは王様になったんじゃないかなという考えになって、娘さんが『たまらなく口惜しい』のは、メロスが王様になったとするならば、娘さんは民衆に裸を見られると王様としての名誉が崩れてしまうから、恥ずかしいんじゃないかなと思いました。

「もしメロスが王様になったとして、赤いマントをつけただけで王様になったというのですが、なぜ少女が王様の赤いマントを持っていたのか、その辺の人が持っていたら話としておかしくなってしまう」

「プラスで、そもそもメロスが王様になったと断言する、推測する証拠がない。確かに『王様ばんざい』と『緋のマント』はあるけれど、逆にそれだけで、その間に何があったのかと予測できることが少なすぎるので、さすがにメロスは王様になっていないと思います」

令和版向山型国語を更に追究していく。

教育新宝島

11月特典 No.12 | 2024年11月

向山洋一 教育資料

1986.10.29 「大造じいさんとガン」

子どもが作る問題はこれまでの授業の反映である

特典映像

https://vimeo.com/1021332799/637a939afb

発行日 2024年11月１日

発行所 向山洋一教育技術研究所

所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台２丁目４番12号

谷和樹の教育新宝島
https://shintakarajima.jp

向山洋一公式ウェブサイト
https://mukoyamayoichi.com

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用することを禁じます。

教育新宝島 ― 11月特典 向山洋一 教育資料 ― No.12 2024.NOV. ― 1986.10.29 「大造じいさんとガン」子どもが作る問題はこれまでの授業の反映である